

WHO ウェビナーシリーズ Risk-informed governance で基調講演を行いました

(2025/11/25)

テーマ：Using technology to facilitate risk-informed governance（災害リスクを考慮した政策を推進する技術活用）

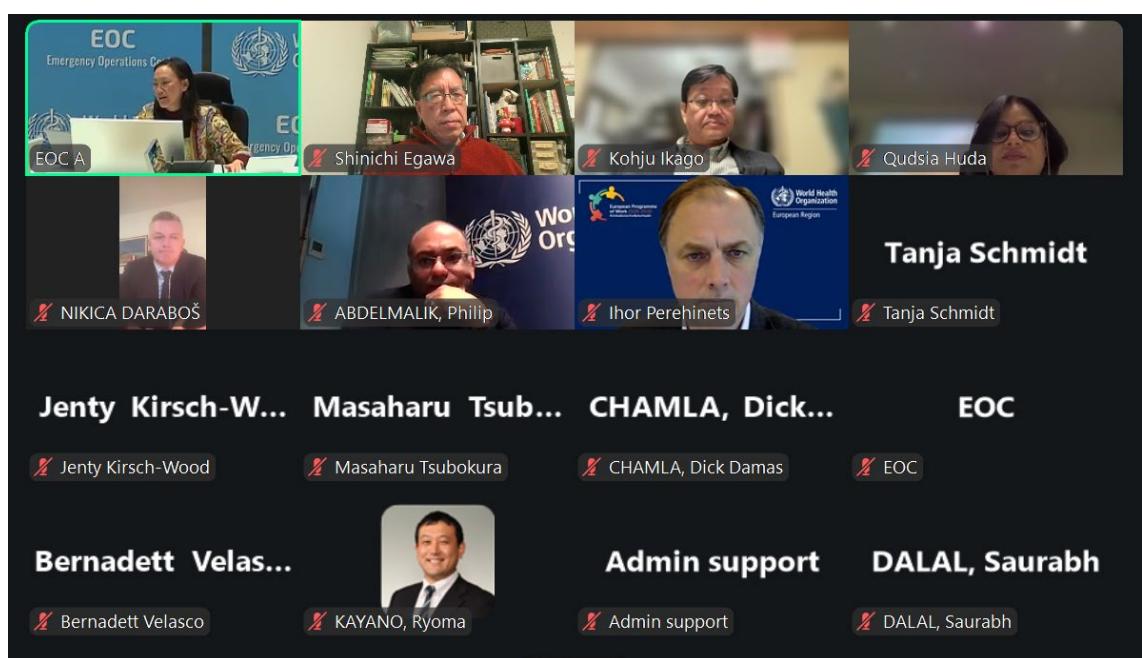
会 場：オンライン

2025年11月25日（火）に開催された世界保健機関（WHO）のウェビナーシリーズ第2回において、災害評価・低減研究部門の五十子幸樹教授（地震工学研究分野）が基調講演を行いました。このウェビナーシリーズは、WHOが国連防災機関（UNDRR）、国連開発計画（UNDP）、世界気象機関（WMO）、アジア災害防止センター（ADPC）、および東北大学と共に、災害リスクを考慮した政策を保健セクターと防災セクターが協力・協働するために開催されました。世界中からオンラインで100名近くが参加しました。

五十子教授は、免震構造と耐震構造の違い、技術的な進歩について説明し、医療機関における免震構造の有無が地震発生後の病院の機能を大きく左右したことを、ノースリッジ地震、阪神淡路大震災、トルコ・シリア地震などの事例で示しました。災害医学研究部門の江川新一教授（災害医療国際協力学分野）は、阪神淡路大震災を契機に日本の災害医療体制が確立したことと、防災セクターと健康セクターの協力が大きく日本の備えを改善していることを追加発言しました。

わが国からは福島県立医科大学の坪倉正治教授も原子力発電所事故後に何が起きたのかをデータにもとづいて論文にすることの重要性を報告しました。フィリピンの災害医療情報システム（SPEED）、スーダンの災害リスク情報システム、感染症に対するWHOのデータ統合システムなど、世界中で技術的な進歩を活用して、データに基づく合理的な防災が行われていることが報告されました。一方で、そのような技術、防災を念頭においた政策が社会実装されていない地域もまだまだ多く、格差の是正が求められています。

東北大学はWHOとも協力し、社会全体として防災を推進する災害・健康危機管理枠組の推進に努めています。



オンライン講演する五十子教授

文責：江川新一（災害医療国際協力学分野）